

総合人文科学研究センター研究部門
現代社会における「想像力」の総合的研究

2021 年度第 1 回研究会の報告

日時：2021 年 6 月 26 日（土）14 時 00 分から 15 時 40 分

方法：Zoom 使用によるオンライン形式。

このたびの「想像力」研究 2021 年度第 1 回研究会は公開で開催し、部門構成員を含む 12 名程度の参加者を得た。今回は、飯塚真弓先生（招聘研究員）が「宗教的贈与における想像力—南インド・ヒンドゥー寺院の寄付を事例に」という題目の下、話題提供を行った。また、國弘暁子先生（本学教授）がコーディネータを担当した。以下に、飯塚先生のご執筆による当日のまとめを掲げる。

宗教的贈与にみられる想像力とはいかなるものか。本発表では、南インドのヒンドゥー教寺院を対象に、信者から寺院司祭への贈与を促す宗教規範として神への信愛（バクティ）に着目し、神を相互行為、社会関係のなかに位置づけるユートピア的な社会の想像に贈与実践がかかわることを示した。対象地独自の贈与制度と、信者から司祭への多様な贈与実践を事例として、宗教的贈与の授受が寺院司祭の生を意味づけ、価値ある存在として社会に定位させることにかかわる実践であることを明らかにした。寺院の贈与制度の歴史から、英国植民地支配をはじめとする近代化や市場化が、私設寺院としての自立や自治の権利獲得を促したこと。これにより、宗教的贈与の場に、司祭と信者の個別の関係性を基盤とする寄付実践と、こうした寄付が司祭の生の聖俗の両輪を支える贈与制度の独自性を生み出すとともに、実践の多様性を促したことを示した。発表後は、道教やキリスト教研究の視点から、ヒンドゥー教の贈与の枠組みや集合性と個別性について、またフィランソロピーや *stewardship* について植民地主義がインド国内の権力関係だけでなく、土着の文化や宗教面にいかに影響を与えたのか、について議論がなされた。（飯塚先生記）

次回の研究会は、7 月 24 日（土）に、オンライン形式で開催する予定である。（報告取りまとめ：御子柴）